

視点・論点 「高齢社会と図書館」

2013年01月30日(水)

今、情報技術の進展に伴い、公共図書館は地域の情報センターとしての役割を担いつつあります。一方、日本は高齢社会に突入しています。そこで、今日は高齢社会における図書館の役割について考えてみたいと思います。

日本は、現在、65歳以上の人口が23%を超えます。5人に1人が65歳以上、9人に1人が75歳以上の高齢者という「超高齢社会」です。

しかも高齢化のスピードは、他の国々がかつて経験したことのない速さで進行しています。およそ60年前の1950年、日本の高齢者比率は5%未満でしたが、2010年には世界でもトップクラスの高齢化率を誇る国になりました。

高齢化の速度を、高齢化率7%からその倍である14%に到達する所要年数、倍化年数で他国と比較してみましょう。

フランスは115年、スウェーデンは85年、アメリカは69年かかりましたが、日本はわずか26年です。いかに急激なスピードで、高齢社会に突入したかがわかります。もっとも、今後は南米やアジア諸国でも高齢化が進み、倍化年数は、ブラジルでは21年、韓国では18年と予測されています。もはや高齢化問題は、欧米諸国に限った話ではないのです。

ところで、高齢者の実態は実に多様です。一律に「高齢者」とまとめてしまうと何も見えなくなってしまう危険性がありますが、ここでは、近年内閣府などが実施した各種調査の結果をもとに、現在の日本の高齢者像をみると、健康・スポーツ活動や地域行事、趣味などの活動に参加して、生きがいを感じる人が多いものの、学習活動に限定すると「参加してはいない」が、関心はあるようです。健康面では、70代までは半数以上の人々が自覚症状のない、健康な生活を送っています。近所の人たちと「親しくつきあっている」割合が半数を超え、ボランティア活動や社会活動に参加しているもしくは参加したことがある人も約5割を占めます。